五原歌集

立原正秋全集

第十三巻

角川書店

立原正秋全集　第十三巻
昭和五十八年五月十二日初版発行

著　者　立原正秋
発行者　角川春樹
印刷所　新興印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七一一一（大代表）
振替東京三―一九五二〇八　〒一〇二
Printed in Japan 0393-573413-0946(0)
落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集　第十三巻　目次

紬の里……五
雪の朝……一七九
のちのおもいに……一九七
鵙……二二五
錆鮎……二六五
くれない……二九九
乾いた十月……三三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

荻野村にて……三六九
山椒の木のある家……三八七
埋葬……三九九
やぶつばき……四二七
解題　武田勝彦　四四三

紬の里

第一章　雪の四年

一

志保子は機(はた)を織る手をやすめ、窓ごしに表通りを見おろした。消雪管から清冽な水が噴きあがっている。消雪管は道路の中央に埋めこんであり、そこに地下水を通していくつもの小穴から噴出させ、道路の雪を溶かすようになっていた。水は二列になって噴きあがっていた。列と列とのあいだが六十センチほどあり、水はそれぞれ道の端にむかって彎曲して噴きあがっている。

前夜半から今日の午前にかけてつもった雪は例年より二旬早かった。八十センチはつもったろうか。秋が闌け、やがて野面も山も枯れてくると、あたりはすべて死んだ風景になる。そこに初雪が降ると、瞬時に華やかな世界になるが、やがてこの雪世界そのものが死んだ風景に一変する。

死んだ風景のなかで二列の噴水だけが生きもののようだった。噴水と噴水のあいだを人が歩いている。列車がついたのだろう、ひとしきり人の姿が絶えなかった。前夜、志保子は、おそくまで機の前にいた。そして、ふと手をやすめたとき、夜の音がすっかり跡絶えているのを知った。

「雪だわ」

窓をあけてみたら夜が白一色になっており、街路燈に照らしだされた道路ではすでに消雪管から水が噴きあがって

いた。このとき志保子は、三年前のやはり初雪のふった日に家に現われた高階秀俊をおもいかえしていたのである。高階は染色と織物の研究家で、ある美術大学で教鞭をとっていた。織物といっても高階が研究の対象にしているのは紬と絣が殆どだった。彼は織物の本を書くために全国の織物の産地を歩いていた。彼は、塩沢織物工業協同組合長に案内されて志保子を訪ねてきたのであった。四十歳ぐらいの渋い顔の男だった。そのとき志保子が自分の裡にかすかに揺れる火を視たのは、二十八歳で寡婦になり、三十一歳になるその日まで、男を識らずにすごしてきたせいだったのかどうか、志保子にもさだかでなかった。高階は志保子の胸に火を点じたまま塩沢を去って行った。しかしこれは志保子の思いだけで、高階が知るよしもない火だった。

そしてあくる年の冬にも高階は塩沢を訪れてきた。このときは組合長の案内なしに独りで現われた。彼は、志保子が織りあげた反物をひろげ、いいものだ、とほめてくれた。

そして、そのあくる年、つまり去年の冬、三たび高階が現われたとき、志保子は、来年もまたいらっしゃいますか、と訊ねた。

「まいります。織物もいいが、どうやら僕は雪の越後に惹かれて、こうして毎年きているらしい」

高階は湯沢の温泉宿に泊っていた。高階が帰るという日、志保子は湯沢の駅に高階を見送った。それはスキー客にまぎれての目だたない見送りかたであった。田舎のこととて、前夜おきたことはあくる朝はもう隣の村まで噂になってひろがる土地であった。

やがて通りでは人の姿が跡絶え、二列になった噴水だけが清冽な彩りを見せていた。志保子の亡夫は、志保子が二十三歳のときに迎えた婿養子で、高等学校の教師をやっていた。六つ年上の夫はおとなしい男であった。志保子の亡父が見込んで迎えた夫で、新潟の大学を出ていた。志保子の生家は代々役人か学校の教師を勤めてきており、かたわら雑貨屋を営んできていた。亡父も町の助役までいき、志保子が夫を迎えた二年目の冬に病没した。志保子は、夫を迎えたあくる年、女の子をうんだ。そして娘が四歳になった年の夏、夫は、勤めていた高等学校の山岳部の生徒を引率して谷川岳にのぼり、ロッククライミングの途中転落して死亡した。志保子は夫の遺骸を見なかった。遺骸は転落

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

によるひどい破損で、同じ教師仲間が、荼毘に付して持ち帰ってきたのであった。死亡の通報があったとき志保子は現場にかけつけるのを拒んだ。常と変った夫を見るのを拒んだのは何故だったのか。死亡のしらせを受けたとき志保子は動転したわけではない。その日も志保子は高機の前にいた。むごい姿に変った夫を見たくないと思ったのは、女のつめたさだったのか。志保子は葬儀が終ってからはじめて涙をこぼした。

塩沢で座繰糸を使っているのは志保子だけである。これは家内工業による糸繰の絹糸である。糸がふとく粗いので、織っているうちに切れることが多く、いまでは塩沢絣のほとんどが上質の絹糸を使っている。そのかわり、座繰糸によって織られた素朴な味は出ない。志保子の織った反物は、上質の絹糸が出せる手のこんだ織りはうまれなかったが、しかし、絹による木綿の味が出せた。したがって高機よりも躙機による織りの方が素朴な味が出せた。志保子は子供の頃から織ることに興味を示し、躙機による織りは祖母から習いおぼえた。高機による織りは母の代からであった。塩沢には現在千三百人の織姫がいるが、そのうちの三分の一は家庭の主婦である。彼女達は、雪に閉ざされた冬のあいだだけ機の前にすわる。数すくなくなった躙機を使っているのはこの家庭の主婦であった。躙機によって織りあげられた反物は、常陸の結城紬と同じであった。

志保子が高機を使うのは夏塩沢であった。これは薄地の絣で、織りあげた反物は三月はじめから四月末までのあいだに雪の上で晒す。いわゆる世に言う上布であった。ちかくの魚野川のほとりに晒場の家があり、志保子もむかしその家に行ったことがある。雪の上に反物をひろげ、その上から二時間おきに水をかけて三日から四日間晒すのである。こうして、上布の白さと、さらっとした肌ざわりと、織物の光沢が出せた。

消雪管から地下水が噴きあがっている。道路の雪をとかすのに地下水を利用した消雪管を考えだしたのは、長岡市であった。越後は地下水の豊かな土地で、塩沢も長岡をまねて消雪管をこしらえたが、長岡ではすでに地下水が減少してきたと伝えられていた。志保子は噴きあがっている地下水を眺め、高階はいつ来るだろうか、と考えた。

二

例年より二旬早くつもった雪は数日のうちにとけてしまうかと思われたが、数日後には再び大雪がふりつもり、今年の越後はそのまま雪の季節にはいってしまった。近くの石打スキー場ではスキーヤーの往還がしきりである、との話だったし、車もすべてスノータイヤにきりかえて走っていた。

高階がきたのは、志保子が染屋から戻ってきた昼すぎだった。塩沢の殆どの女が、織元から糸をもらい、織りあげて工賃をもらっていたが、志保子は自ら座繰糸を買いつけ、それを染屋に出し、織りあげたのを問屋に買ってもらうのであった。

この日、志保子は、染屋に糸染めの具合を見に行ったのである。塩沢で織るのは塩沢御召、駒上布、本塩沢絣、夏塩沢、塩沢紬、越後上布、草木染、夏紬、塩沢結城、古代上布、ゆきやま紬などであるが、志保子が織るのは塩沢結城と越後上布であった。ゆきやま紬というのは、ある織元が宣伝のためにつけた名で、反物はほかの塩沢と変らなかった。越後上布は国から無形文化財に指定されていた。志保子の技術はその無形文化財に指定されていたが、格別にそのことを名誉と感じたことはない。上布は織る前の糸括りが大切であった。糸括りは染屋の仕事である。結城では糸括りの名人を無形文化財に指定している、ときいていたが、塩沢にはそんな話はなかった。志保子は自分の技術が無形文化財に指定されたとき、そのことを格別にも感じなかったのに、町では、若くして国からそんな指定を受けた志保子をほめたたえた。指定を受けたのは四年前であった。

消雪管から噴きあがっている水のあいだをぬけて家の前についたとき、目の前にタクシーがとまり、高階が降りてきたのである。彼は去年と同じ黒い外套を着ていた。

「あら！」

志保子は思わず声をあげた。なつかしい人であった。

「お元気ですか」
「はい。わたしはかわりようがありませんもの。どうぞお入りになって」
志保子は玄関をあけた。消えていた火が再びともった感じがした。
部屋に招じいれ、茶をだしたとき、高階は志保子の前に紙包みをおいた。
「織っている人に織物をあげるのは、すこしおかしいでしょうが、このあいだ能登に行ったとき、気にいった上布がありましたので、なにかの参考になると思って買ってきました。上布というと白地に亀甲よせが多いのですが、これは藍地に白い卯の花模様で、藍がなんとも言えないような色に出ているのです」
「わたしにくださるんですか」
志保子は目をかがやかせた。それから包みを解いた。それは、まことに気品のそなわった上布であった。
「地染めでこんなこまかい花を織りあげたのですね」
志保子は反物を手にとり、卯の花に見入った。
「地染めです。いい色でしょう」
「いい色ですわ。どんな人が織りあげたのでしょう」
「六十五歳になるお婆さんです。会ってきましたが、能登上布ひとすじに生きてきた人ですね」
「これ、ほんとにわたしにくださるんですか」
「よかったらもらってください」
高階の目があたたかかった。
「有難うございます。でも、ほんとに戴いておいてよいのでしょうか」
「織るばかりでなく、たまには御自分でも着てみることですね」
「では、ありがたく頂戴しておきます」
「今年は雪が早かったですね」

「はい。こんなに早く降ったのは、十何年ぶりだそうですわ。こちらには、いつお着きになりましたの？」
「今日です。湯沢の宿屋にボストンバッグをおいて、その足でここに伺ったのです」
「今年は何日くらいお泊りですの？」
「明後日は帰ろうかと考えています。雪の越後に惹かれて、こうして毎年きていますが、なにか、思いが深まる一方ですよ」
なににたいしての思いだろうか、雪にたいする思いなのか、それとも紬にたいする思いなのか、志保子は高階の心を測りかねた。
「宿は、スキー客でいっぱいでしょう」
「いや、そうでもなかったですよ。僕は旧館の離れの部屋にしてもらいましたが、新館とちがって炬燵です。みんな暖房のきいている新館に泊りたがるでしょう。旧館はひっそりしていましたよ。さて、これで失礼しましょう」
「あら、もうお帰りですの。お調べものは？」
「調べものは二年前に終っているのです。温泉につかりにきたようなものです」
高階はたちあがった。
「宿にお訪ねしてもよろしいでしょうか……」
志保子は思いきって言ってみた。
「おでかけ下さい」
「お仕事の邪魔になるといけませんわね」
「仕事は持ってこなかったのです。温泉につかり、炬燵にはいって本を読む。去年もそうでした。おでかけ下さい。明日、宿で、夕食をいっしょにしませんか。明日の夕食にはおいしい鯉を食べさせてくれるそうですから」
「では、お言葉に甘えて、伺わせてもらいます」
志保子はあかるい声で言った。高階を宿に訪ねることで気持が和んできたのである。雪に閉ざされた世界で人を訪

ねることはひとつの慰めとなった。それほど雪の中では動きがなかった。

三

雑貨を売るのは五十九歳になる志保子の母の仕事であった。問屋に注文する雑貨は、週に一度のわりで列車の荷物便でつく。自動車の定期便で着くのもあった。店には雑貨のほかに莨をおいてあった。雑貨や莨を売り、そこからあがる利潤はわずかである。志保子の織物の売上額がやはり家計の支えであった。病気でもしないかぎり、志保子の収入は月に八万から十万円にはなった。娘の節子は小学校の四年生で、おばあちゃん子であった。

湯沢に高階を訪ねる日の朝、志保子は、今日はちょっと出かけてきますから、と母に言ってあった。

そして昼すぎに髪結いに行き、家を出たのは三時だった。志保子は自分が織った着物で出かけた。一つの幅に三つの柄の太縞で、色は濃い藍、浅葱、黒紺、きばた色、納戸を配してあり、帯は柿茶の無地の紬であった。羽織は納戸色の無地紬、その上に黒いコートを着て、高下駄をはき、地下水が噴きあげている道路を歩いて塩沢駅につくと、上りの列車に乗った。

湯沢から宿までタクシーを使った。

高階は離れの二階にいた。

「すこし恥ずかしいのですが、参りました」

志保子は部屋に入ると挨拶した。

「おや、それは珍しい縞ですな」

「織物の本に出ていたのですが、自分で織ってみたのです」

「いい柄です」

「これ、昨日、先生から上布を戴いたお返しに、と思って持ってまいりました。お気に召しますかどうか」

志保子は自分が織った上布を風呂敷からとりだして高階の前においた。白地に黒の亀甲よせの模様だった。
「売物をこんなことをしていいのですか」
高階は上布をとりあげ、布地を撫でていたが、いい肌ざわりだ、と言った。
「もらってくださるとありがたいんですが」
「戴いておきましょう。さっそく仕立ててこの夏に着ることにします」
八畳の部屋には掘炬燵のほかに石油ストーブが燃えており、窓からは山続きの庭が見渡せた。
「去年もここにお泊りだったのですか」
「そうです。四年も来ると馴染みになりますね。夕食を早目にたのんでおきました。東京で食べさせてくれる鯉は泥臭くてどうもいかんのですが、ここは鯉がおいしい」
「洗いがやはりいちばんおいしいでしょうか」
「そうですね。あなたは鯉はあがらないんですか」
「いいえ、食べますが、鯉こくか甘露煮にします」
「甘露煮は、鯉を輪切りにしたのですか」
「そうでございます」
「この宿で去年だしてもらったが、あれは甘くていけません」
「先生は、甘いのはお嫌いですか」
「それほど酒のみでもないのに、甘いのはだめですね」
こんな話をしているうちに、五時すこし前に宿の女中が夕食を運んできた。銚子が四本ついていた。
「では、おねがいいたします」
女中は志保子にたのんでさがって行った。
「すこしおのみになりますか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com